

コメント―現在、編集に携わる者の一人として

以上四氏の寄稿は、二〇一六年度史学研究会大会での講演をもとにしたもので、講演の内容は本誌一〇〇巻一号にすでに収録されているが、今回新たに稿を起こしていただいた。なお、四氏は歴代の理事長でもある（礪波氏一九九八―二〇〇〇、紀平氏二〇〇四―二〇〇六、金田氏二〇〇六―二〇〇八、上原氏二〇一―二〇一四）。四氏にはここにあらためて謝意を表する。また、同号には次号（二〇一巻第一号）に掲載する旨を予告していたが、編集の都合上、一号早めたことを最初におことわりしておく。

以下、現在編集を担当する者の一人として、四氏の記述を補う形で、史林の「器」としての変容について補説するとともに（現在では、史学研究会のホームページでバックナンバーの内容を一覧できるが、古いものについては文章の題目が並ぶだけでカテゴリーは示されていないし、「器」までは示しようがない）、近年の動向そして今日『史林』が抱えている問題点に言及し、会員諸氏のご理解をいただきたく、いささかの贅言を弄することを寛恕されたい。

『史林』は一九一六年に年四回の刊行でスタートした。第一巻の枠組は上原氏が紹介するように「研究、叢説、雑纂、批評、紹介、彙報、会報」から成っていた。「研究」はもちろん現在の「論説」にあたるが、「海外学者の研究の訳述」も含むと説明されている。しかし、実例は、ルードヴィヒ・リースの「世界史の使命」六巻三号―七巻一号のみで、「雑纂」としても、若き宮崎市定が桑原隲藏に命じられて訳したゲオルグ・ヤコブ「西洋における東洋の影響」（一一巻一―三号）などごく少数である。「叢説」は「研究又は発見に関する径路、帰結、歴史教育に関する論説等」とされるが、第四巻ではやくも姿を消している。「紹介」は分野別に本を紹介し、さらに雑誌論文名・新聞記事も載せていた。後者は『史学雑誌』の文献目録に少しく似ているが、このスタイルは二回限りで終わった（三三・三四巻で一時的に復活）。「彙報」は京大の内外の各学会の情報を集めたものである。発行元は宝文館であり、第六巻からは内外出版となる。

第二巻から「昨年の史学地理学界」の掲載が始まり（上原氏が言うように、考古学についても述べられている）、第一五巻まで続く。ちなみに『史学雑誌』の名物「回顧と展望」が始まったのは、戦後の一九四九年からである。

また、上原氏が考古学関係の濱田耕作（八回）や天沼俊一（四

十回）の連載に言及しているが、論説の小分けは別として、その他の連載物としては、李能和「朝鮮神教源流考」（六回）、梅原末治「銅剣・銅鐙に就いて」（七回）、今西龍「朝鮮史の栞」（六回）、牧健二「欧米人の書ける日本史の栞」（八回）、三浦周行「欧米の古文書館」（四回）があるきりである。また、色んなものを詰め込める「雑纂」の名は第二三巻で消えた（ただし、そうした文章自体は残り、二段組にされて本文との差異化が図られた）。二五巻からは「資料」が登場し、「神護寺文書」七回が連載されたが、コーナーとして定着したとは言えず、現在史料紹介は投稿規定に一項として立てられてはいるが、散発的である。

上原氏によれば、考古学においては五〇年代まで、発掘報告など論説以外のかたちで『史林』は学界を活性化するツールとなっていたということだが、他の分野で「器」としての『史林』が活かされたということは、表面的に見る限りではなさそうである。一方、論説を複数回に分けて掲載することはごく当たり前だった（一九六九年を最後になくなった）。史林初期の会員数の少なさ（当時は会員名簿が毎巻に載せられていた）を考えれば当然の話だが、会員が増えてゆけば、なるべく多くの方に執筆の機会を提供しなければならぬので、（上）（下）、（上）（中）（下）が消えてゆくのも自然の成り行きである。

しかし、それとは別に連載コラムのような誌面の「遊び」があってもよいのではないかと個人的には思うことがある。たとえば、『古代文化』などは、こうした連載を多用している。あるいは『史学雑誌』のコラム「歴史の風」を見習え、というつもりはないが（始まったのは、一九九六年の一〇五巻一号の樺山紘一氏から）。

さて、創刊直後はそれらしく色々な試行錯誤はあったが、しばらくして誌面は「安定」する。この間の変化は、第一〇巻（一九二五）から裏表紙が英文になったこと、一六巻から論説が一段組みとなったこと（戦時中の二八巻二号で二段組みに戻る）くらいであろうか。

『史林』の誌面が大きく変わり、いや変わらざるを得なかったのは、戦後の一九四六―五〇年のことである。それまで年四冊の刊行を維持してきたが、第三一巻は一九四六―四七年の二年をまといて三冊、三二巻も二年がかりで二冊しか出ていない（ちなみに三〇巻四号―三一巻は星野書店、三二巻一号は秋田屋と発行所が変わり、二号は「非売品」で、次巻からは教育タイムス社からの刊行がしばらく続く）。

そうした産みの苦しみの中で、新たな動きが起きていたことは、礪波・紀平両氏が指摘されるとおりである。それは、第三三巻一

号の「編輯後記」(これまではほとんどついていたが、以後定常化する)の「各部門の間に何等の統一的な連関が見られない従来の編輯方針に対して反省が加えられ」という文言や礪波氏が引用している二号の佐伯富編集長の長文後記にも表れている(しかし、こうした動きは、礪波氏が紹介する「新しい世界史」の頓挫同様、長続きしなかった)、外形的にもこの時期にいくつかの変化が起きているのである。第三三巻二号から論説の頭に「梗概」(すぐに今日の「要約」に名前が変わる)が冠せられ、三四巻四号から英文レジュメが添付され、三五巻一号から表紙が現在と同じ色になって「史学・地理学・考古学」というおなじみの文言が入るようになり(発行元は教育タイムス社から史学会に、そして印刷所は中村印刷に代り、今日までそれは続いている)、三七巻から年六回刊になったこととあわせて、現在の「史林」のスタイルはほぼこの頃にできあがった。

そして、四三巻で研究ノートが登場する(ちなみに『史学雑誌』で研究ノートが登場するのはその三年前)が、ノートを始めるとするだけで、定義はされていない。当時、論説は二段組みであり、ノートは活字のポイントを下げることで差異化された。論説の一段組が復活したのはだいたい五五巻一号で、この時の編輯後記で西洋史の教授であった越智武臣氏は、思い切ってこ

うスタイルしてみたが、「因襲というものは簡単なことを替えるのにも意見のなかなか揃わぬものである」と述べられている。しかし、『史林』のスタイルが今日の姿になってからも変化がなかったわけではない。最も大きな変化は、いうまでもなく例会の復活に伴う毎巻一号の「特集号」である。例会の復活は、紀平氏の発案によるものと記憶しているが、毎年四月第三週土曜日に共通テーマを設定して八分野からそれぞれ講師を招き(途中から五人に変更)、その内容を翌年の第一号特集号に掲載するというスタイルはすでに十年以上継続し、すっかり定着した。このころ、通常号が薄手になってきているが、特集号のおかげで年間総ページ数を従来とさしてかわらぬレベルに何とか持ちこたえている。

ただ、表面化しなかった動きや、頓挫した試みもある。史学会が科学研究費の出版助成を申請しなくなってもうかなりの年月が経ち、それが当たり前になってきているが、それ以前の理事会・評議員会の議題はもっぱら申請条件をクリアするための方途の模索であった。求められていたのは、国際化(英文の部分を増やす)、インパクト・ファクターなどである。

また、『史林』の存在を周知してもらおうと、東京堂出版に委託販売していたこともある。今までどおりの雑誌が送られていた

会員諸氏には余りピンとこない話だろうし、我々ですら早くも忘れかけている。しかし、それが始まった頃に東京に出かけた折、神保町の三省堂書店で特集号がかなり目につきやすい場所に置かれているのを見てホーッと思ったことを今も覚えている。以後売れ行きは伸びず、返品が多くなり、やがて撤退となった。その間は「納期厳守」ということで、史林名物の刊行遅れもなかったが、現在では元通りになってしまっている。

金田氏は、国際化、学界におけるプレゼンスの強化、社会的認知といった事柄はこと本誌にとどまらず、人文科学全体の問題であると述べているが、「動かさること山の如く」見える本誌も、水面下では足をバタバタさせていたのである。

しかし、出版助成を申請せず、納期に追われることがなくなっただけからといって、問題は解決したわけではない。別に『史林』に限ったことではないが、日本語で刊行される人文系の学術雑誌に国際化＝英語化への同調圧力がひたひたと押し寄せてきているのである。

かと言って、『史林』が英語雑誌に変わることは、まず当分はありえない。仮に英語になったとした場合、失われるものもまた大きい。これが非常に限定された分野の専門誌なら話は別だが、『史林』は総合的な学術誌であり、投稿者が多様ならば、想定さ

れる読者もまた多様である。他分野の論文を面白そうだからちょっと読んでみようという気になった読者がいたとして、英語はそれを遠ざけてしまうだろう。実際には、専門・細分化が進むなかで、「共通言語」が徐々に失われつつあるが、金田氏が言われるように「日本では人文学は、一般的に日本語を基礎としている」とは言うまでもない。人文学がこれらの広義の文化を対象としている限り、言語と切り離して考えることができないのである。そして、多分野から構成される編集委員会は、「共通言語」の確保に努めてきたし、今もそれは編集会議の至上命題である。

教育社会学者で現在はオックスフォード大学にいる荻谷剛彦氏の近著を手にとった（『オックスフォードからの警鐘』中公新書ラクレ、二〇一七）。グローバル化に成功しているオックスフォードの高みから日本の「スーパードグローバル大学」をなで斬りにする、といった内容なのかと思ったら、そうではなかった。日本語の壁が不透明さを生み、対外障壁となっていることが日本の大学を守ってもいると皮肉りつつも、近代化・西欧化の経験の中で西欧的知識を日本語化してきた蓄積による教育・研究が、日本の知的資源の強みだという（旧植民地国であれば、自国の歴史を研究しようとしても多くは西欧語の先行研究に頼らざるを得ない）。荻谷氏は日本の文系学問の中の「国際派」と「国内派」の

分断を橋渡しするためのプロデュース力が必要だとして、具体的には「国内派」の業績の蓄積を英語に翻訳編集して発信することを提案している。

もちろん、これは簡単にできることではない。私が関わっているもう一つの雑誌『東洋史研究』で、近五年の既掲載論文中優秀なものを一年に一本英訳して載せたことがあるが、こうしたささやかな試みでさえ、五年間しか続けられなかった。我々にはそれに必要なマンパワーを確保し、組織する力がなかったのである。

私自身、この仕事にかかわってきて、今となつては「アレは何だったのだろう」と思うし、仮に『史林』でそういうことをやれと言われたとしたら、真っ先に反対するだろう。

しかし、「国内派」の最たる者である私にも、『史林』について忘れることのできない思い出がある。大学院にいた頃、同期の故谷井俊仁氏が『史林』に論文を載せた（第七〇巻六号「乾隆時代の一広域犯罪事件と国家の対応―割辯案の社会的素描」）。すると、アメリカの著名な研究者フィリップ・キューンがこれに注目して、研究室に？連絡を取ってきたのである。記憶には曖昧なところがあるが、「こんなこともあるんだ」と驚きと羨望を覚えたことは今なお覚えている（谷井氏はのちにキューンの著書『中国近世の靈魂泥棒』を夫人と共訳した）。

私が学生だった八〇年代、日本の東洋史研究がそれまでに挙げてきた成果には世界の中で無視できないものがあり、とりわけアメリカの学者は日本の研究の吸収に熱心だった。しかし、現在アメリカから出版される中国史の研究書を見ても、日本語の研究が引用されることがめっきり少なくなった。だから、三〇年前のようなことが今起きるかと言われれば首をかしげざるを得ないし、他の分野でも『史林』を介したこうした幸せな出会いがあったのか、そして今もあるのかは知らない。

しかし、長い時間をかけて議論した末に大会総会に諮られようとしている『史林』のリポジトリ掲載によって、国内外を問わず、著者と新しい読者の出会いの場ができることになるだろう。もちろん、議論の過程では「現会員にとつてのメリットが失われる」より現実的に言えば、「会員数が減るのではないか」という懸念も表明されてきた。ただ、そうした負の要素を上回るメリットがあるのではないか。会員数の漸減傾向に歯止めがかからない中で、新規会員の獲得に努力すべきは当然のこととして、非会員にも『史林』がこれまで挙げてきた学術的成果をアクセスしやすい形で提供する、挫折した委託販売による雑誌の販促ならぬ、研究成果の公開促進がもたらす効果に、我々は期待しているのである。

非会員という立場でみると、『史林』はこの大学でも見られ

るという状態にはない。試みに京都大学蔵書検索の「他大学検索」にかけてみると、さすがに、各分野の専門誌（『日本史研究』を除く）に比べると多いが、同じ総合誌である『史学雑誌』（六四八館）、『歴史学研究』（六一五館）には大きく引き離されて、三七九館である。そのうち、全巻の四分の三以上を有するのは三分の一で、約半数の館は半分も持っていない（以前、『史林』を入れていない図書館に販促を試みたが、反応は皆無だった）。今や古典的な研究となっているものだけでなく、近年（四年以上前）に掲載された若手研究者の論文が新たな読者を獲得することを切に願っている。

そうした希望の前提となるのは、むろんこれまでどおり良質の誌面を提供してゆくことである。その編集作業が難渋を極めていることは、お手元に届いている本誌をご覧になれば察しはつかれると思う。一〇〇巻三号においては、ついに論説一本（ただし、研究ノートは二本）という史上初の事態に立ち至り、その後も四五、そして本号と各論説二本という低空飛行が続き、一年総計で論説一六本は、現在の枠組になってからやはり史上最低である。

その根本因は、投稿量が足りないということにある。私が編集をひきついでかれこれ半年になろうとしているが、その間に新規に投稿された論説（再投稿・修正投稿を除く）は一三本である。

これだけで多い少ないは判断できないだろうが、投稿↓審査（月一回の編集会議）↓即掲載決定となることはまずなく、投稿から掲載決定に至るまでに三・四か月あるいはそれ以上かかることはザラなので、年六冊（実際には特集号は別枠なので五冊だが）を維持していくのは、綱渡りに近い。

なぜ投稿が少ないのか、私にはわからない。若手研究者に「査読付」雑誌掲載の実績作りが求められるなか、百年以上の長い伝統を有する老舗で、査読誌である『史林』（もつとも、うかつなことに査読誌であることはいままで公示されていなかった。ようやく最近その旨を投稿規定に明示したところである）にもっと投稿があってもよさそうなものである。以前に比べて発表媒体が増えたからなのか、あるいは「章末注、全て縦組」というオールド・ファッションや判型の問題が、横文字の多い分野や図版を多用する考古学からの投稿意欲を削いでいるのだろうか。とにかく、結果としてわかっているのは、『史林』が投稿対象として魅力あるものに映っていないらしいことである。上原氏がかつて持っていた「学界にデビューするための登竜門」という意識が薄くなってきたのだろうか。

ただ、投稿を阻害するファクターとして、『史林』の査読は厳しすぎる」あるいは「けっきょくは京大の雑誌だろう」という考

え方があるのかもしれない。私自身、少し前までそう思っていた。

非京大系の執筆者についてみると、創設当初の史学科の教官の多くが東大出身ということもあつてか（また、礪波氏がいうように、戦後すぐまでは、史学研究会と史学会が交流を持っていた）、戦前までは、坪井九馬三、黒板勝美、辻善之助、加藤繁、池内宏、原田淑人、平泉澄、和田清、板沢武雄といった東大の教官が投稿している。しかし、戦後にはこうしたことはなくなり、論説では伊東多三郎の一本のみで、あとは伊東、井上光貞、大津透、部勇造、島蘭進が書評を寄せているだけである。また、戦前には、柳田国男、大類伸、幸田成友といった人たちの原稿も載っているが、戦後になると、私でも名前を知っている著名人には、古田武彦、東野治之、網野善彦といった日本史の研究者しかおらず、それも五〇巻台までのことである。むしろ、私が知らないだけで、非京大系の方々の投稿も少なからず載ってはきたのだが、一般的イメーজとしては、やはり京大色が強いということになろう。

しかし、実際に編集部に入つてこうした先入観がまちがつていたことが分かつてきた。

まず、査読についてだが、厳しいというより「丁寧」というのが正しい。歴代編集委員は我々教員を除いては、ほぼボランティア

アに近い形で多くの時間を割いて審査報告を作り、それをもとに他分野の委員が主に「共通言語」の面から種々の指摘を行う。近年、これに加えて副査制が導入され、今まで以上に専門家からの検証が担保されるようになっていく。したがって、掲載までに時間がかかるかもしれないが、本誌に掲載された文章には、インパクト・ファクターといった目に見えるものではない、付加価値がついているのだということを強調しておきたい。

一方、京大色については、統計を取ったわけではないが、京大系の占有率が低下しているのは間違いないだろう（まだ掲載までに至っていない投稿も、外部の方からのものが増えてきている）。前述した三号唯一の論説の著者は神戸大学に留学したモンゴル人だし、本号には論説としてはおそらく史上初だろうが、外国からの投稿論文が載っている。これまでにない、思わぬ投稿のかたちも出てきているのである。

この文章を書いている途中で、この半年間で研究ノートが一本も投稿されてきていないことに気付いた。あらためて近五年（九六―一〇〇巻）のデータをとてみると、論説一〇〇本に対してノートはわずかに九本しかない。こうした傾向が始まったのはここ十年のことで、それ以前はほぼ年間五本以上載っていた。じつは、近年の『史林』の誌面上の最大の変化はここにある。『史学

雑誌』が、論説よりノートのほうが多い（『回顧と展望』を除けば年間十一冊。このところ、論説一、ノート二というのが一般的）のと好対照でもある。

これまで『史林』に掲載されてきた研究ノートのどれほどが最初からノートとして構想されたものなのか、論説がノートに化けたものがどのくらいあるのかは知らないし、ましてや『史学雑誌』になぜ研究ノートが多いのかも知らない。

しかし、ノートが「論説より品下るもの」との考えが投稿者にあるのなら、そうではないと言いたい。たしかに分量面で論説よりライトであり、語感も軽い。しかし、学術的価値が論説より劣

っているわけではない。ただ、我々自身が「投稿規定」に研究ノートとは何かを示さずに、単に字数のことしか言っていないところにも問題があり、今後の検討課題である。

『史林』には「遊び」がないと途中で言ったが、実際に新しい試みをするのはなかなか難しいかもしれない。しかし、「論説」一本かぶりの状況は「雑」誌を貧相にする。読者諸氏には、論説はもちろんのこと、ノート、研究動向、史料紹介、書評、紹介をどしどし寄稿していただきたい。よろしく願います。

（中砂 明德・京都大学大学院文学研究科教授）